

[講演要旨]

高知城下にあった宝永堤の津波対策としての評価

松尾裕治(香川大学四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 客員教授)・村上仁士(徳島大学名誉教授)

§ 1. はじめに

近年、全国各地で地震や気候変動による外力の増大などにより、防御施設規模を上回る規格外の災害が発生している。施設の有する機能には限界があり施設では防ぎきれない大災害は必ず発生することを改めて社会全体で共有し、津波・高潮・洪水に備えるための「水防災意識社会再構築」を進めることが求められている。土佐藩が洪水や高潮・津波から重要な町を守るため行なった水防災対策(大堤防や中堤防(水張堤)等から、特に中堤防のひとつである高知城下町に築造され、明治後半に撤去された宝永堤に着目し、津波対策としての評価を試みた。

本発表では、収集した藩政期・明治・大正・昭和時代の高知の絵図面、記録、水防関連古文書等をもとに、高知城下周辺で行われた藩政期の水防災対策跡が残る場所の現地調査などから、藩政期の水防災を評価するとともに、今後の水防災・危機管理の取り組みの参考として調査結果を紹介する。

§ 2. 藩政期の高知城下町の水防災

藩政期の各種史料から調べた結果、土佐藩は、高知城下町の建設に取り組むに当たって、洪水・高潮対策として、城下町の周辺に高い堤防(鏡川北岸の郭中で1間 3 尺(2.8m)を築き、近郷近在の河川に霞堤や水越(越流堤)を建設、内陸の平地には多くの中堤(水張堤)を設けて、重要な城下町の水害の軽減を図っていたことがわかる。図1のように高知城下の東側や北側の平地に流れ込む大きな川、国分川や舟入川には、霞堤や水越(越流堤)を設けて、上流部で氾濫させて下流部での氾濫量を抑える工夫がなされている。また人家と田畑の境などに、中堤または水張堤と呼ばれ、氾濫後もその堤の高さまで水を張り、重要な場所を洪水や高潮から守る堤防が築かれている。なかでも宝永堤は、郭中(現在の堀詰、中央公園)から東に広がった下町を洪水や高潮・津波から守るため、中堤防(水張堤)として、万一、大堤(川沿いの堤防)が破堤した場合に、氾濫の拡大を防ぐ堤防(現在の二線堤)として築かれた。

宝永堤防は、土佐史談会資料(2004)によれば、「高知城下のもっとも東端には、寛永 2(1625)年南北方向の外輪堤が築かれ、これが宝永大地震で壊れると、すぐに補強して宝永堤を作っている」とあり、宝永地震後に築かれた堤防であったことがわかる。

また、『土佐を語る』(高知県教育会、1937年)によれば、「下知の宝永町は、江戸時代の中世宝永年間に大海嘯の苦杯をなめた後、ここに堤を築いたのに始

まるというから、ここから東は二百三十年前には、まだ完全な陸地ではなかった」とあり、城下町は東の鏡川・国分川デルタ地帯に拡大したこと、宝永堤が現在の宝永町に造られたことが分かる。

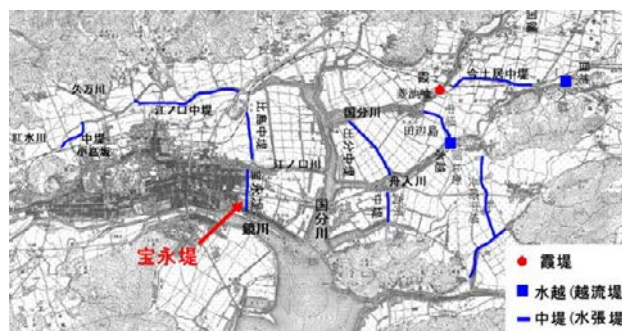


図1 藩政期中堤・水越・霞堤防の状況

§ 3. 宝永堤の津波対策としての評価

安政元年寅十一月大地震日記によれば、「大潮にて下知村支配の中所々堤切れ」とある。宝永堤は、安政南海地震津波には、二線堤として機能しなかったと考えられ、堤防を二段構えにしても確実に守ることができるわけではない、ハード面での防災の限界も示している。この宝永堤は、明治 30(1897)年の土佐国高知市街図に堤防の名称と位置が描かれていて明治後期の電車軌道敷設まで撤去されず保全されていたことがわかる。現在、堤防跡地は南北方向の街路になり、傍らには土佐電鉄の宝永町駅があり、その名残を町名として残している。昭和南海地震では国分川の堤防が決壊し、高知市内は現在の菜園場町横堀公園付近まで浸水した。高知の軟弱地盤上の堤防は大地震による地盤沈下や液状化で破損し、津波対策として役割を果たせない可能性が高い。

§ 4. おわりに

かつてあった宝永堤は、もしもの時、重要な城下町を津波や高潮、洪水による水害から守るため築かれた今後の水防災社会を考える防災風土資源といえるものであった。しかし、その堤防も大地震時には破損し、津波来襲時に役割を果たせなかった歴史が残されていた。今後の南海トラフ地震の津波や高潮、洪水等の大災害に備え、ハードだけでなくハード面での防災の限界を考慮しソフトの面での危機管理を加えたハイブリット対策が必要である。さらに、これらの災害に対し、藩政期の水防災、危機管理の知恵を残し活かすことによって、住民、地域、行政連携の南海トラフ地震津波対策が強化されることを願う。